

2018年6月21日／浪宏友ビジネス縁起観塾

人間性と苦悩

1. 概要

(1) 資料

増谷文雄著『阿含経典1』（ちくま学芸文庫）／存在の法則（縁起）に関する経典群／因縁相応／37識

(2) 主題

十支縁起を通して、執着によって形成された人間性が、苦悩を生むことについて、学んでみたいと思います。

2. 識が生じる

(1) 経文「識」

かようにわたしは聞いた。

ある時、世尊は、サーヴァアッティ（舎衛城）のジェータ（祇陀）林なるアナータピンディカ（給孤独）の園にましました。

その時、世尊は、比丘たちに説いて、かように仰せられた。

「比丘たちよ、繫縛（けばく）するものをじっと味い観ていると、その人には識（意識）が現われてくる」（増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p. 242）

(2) 繫縛するもの

「繫縛するもの」とは「執着して離れられなくなったもの」です。

(3) 識

「識」とは「意識」とあります。

「自分を構成する五つの要素」を見て、「これが自分である」と識別し、認識する作用が、「識（意識）」です。

(4) 自己誤認

繫縛するものをじっと味い観ていきますと、「繫縛するものに心を奪われている自分」を、「これが自分である」と識別し、認識する「識」が現れます。これは、自分に対する誤った認識（自己誤認）です。

自分に対する誤った認識には、「これは自分のものである」「これは自分である」「これは自分の本体である」などがあります。「これ」とは、「自分を構成する五つの要素」です。

これらの自己誤認については、後日、学んでみたいと思います。

3. 十支縁起

(1) 経文「識」

「その識によって名色がある。……六処……、触……、受……、愛……、取……、有……、生…
…。生によって老死・愁・悲・苦・憂・悩が生ずる。かくのごときが、このすべての苦の集積の
生ずる所以である」（増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p.242）

(2) 十支縁起

ここに十支の流転縁起が語られています。

五支縁起は「愛」から始まりましたが、十支縁起は「識」から始まります。「愛」から先は五
支縁起と同じになります。

識によって名色がある

名色によって六処がある

六処によって触がある

触によって受がある

受によって愛がある

愛によって取がある

取によって有がある

有によって生がある

生によって老死・愁・悲・苦・憂・悩が生ずる

4. 大樹の譬え

(1) 経文「識」「大樹」

「比丘たちよ、たとえば、ここに大樹があって、その根は地中にのびて拡がり、さまざまな地味
や水分を吸収するとする。そうすれば、比丘たちよ、そのようにして、その大樹は、久しく住す
ることをうるであろう」（増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p.243「識」、p.238「大樹」）

(2) 大樹が存続する

植物の根は、二つの役割を担っていると言われてています。

一つは、地中から水分、栄養分を吸収して地上の幹に届ける役割です。

もう一つは、木の幹を支える役割です。

この根があるかぎり、地味（栄養分）や水分を吸収し続け、幹を支え続けますから、大樹は長
く生き続け、育ち続けるでしょう。

5. 苦悩が生じ続ける

(1) 経文「識」

「比丘たちよ、それとおなじように、繫縛するものをじっと味い観ていると、その人には識が現われてくる。その識によって名色がある。……六処……、触……、受……、愛……、取……、有……、生……。生によって老死・愁・悲・苦・憂・悩が生ずる。かくのごときが、このすべての苦の集積の生ずる所以である」（増谷文雄編訳『阿含經典1』ちくま学芸文庫、p. 243）

(2) 苦悩が生じ続ける

大樹の根が吸い上げる地味や水分は、「繫縛（けばく）するものをじっと味い観ている」ことです。自分の心身に執着し、快さを求め続け、味わい続けることです。

この快さを味わい続けていると識（意識・我執）が生じ、増大します。そして、十支の流転縁起が繰り返され、我が身にさまざまな苦悩が生じます。

6. 識が現れない

(1) 経文「識」

「しかるに、比丘たちよ、その繫縛するものを、これはいけないぞと観ていると、その人には、識は現れてこない」（増谷文雄編訳『阿含經典1』ちくま学芸文庫、p. 243）

(2) これはいけないぞ

釈迦牟尼世尊の教えを受けて智慧が開けてきた修行者は、自分が繫縛の対象から離れられなくなっていることに気づき、そこからさまざまな苦悩が生じていることに気づきます。そして、このままではいけないと思います。

修行者は、繫縛するものから遠ざかるように気をつけます。

事情や状況によっては、繫縛する者から遠ざかれないこともあります。そのときには繫縛するものから得られる快さに心を奪われないように気をつけます。

このように気をつけていれば、やがて識（我執）は生じなくなります。

7. 十支の還滅縁起

(1) 経文「識」

「識がないから名色もない。……六処……、触……、受……、愛……、取……、有……、生……。生がないからして、老死・愁・悲・苦・憂・悩もないのである。かくのごときが、このすべての苦の集積の滅する所以である」（増谷文雄編訳『阿含經典1』ちくま学芸文庫、p. 243）

(2) 十支の還滅縁起

ここに十支の還滅縁起が示されます。

識がないから名色がない
 名色がないから六処がない
 六処がないから触がない
 触がないから受がない
 受がないから愛がない
 愛がないから取がない
 取がないから有がない
 有がないから生がない
 生がないから老死・愁・悲・苦・憂・悩もない

6. 大樹をなくする

(1) 経文「識」「大樹」

「比丘たちよ、たとえば、ここに大樹があったとする。しかるに、その時、人があって、斧(おの)や籠(かご)をもってやってきたとする。そして彼は、その樹を根から伐(き)った。根から伐ると、今度はその周りに穴を掘った。穴を掘ると、小さな根や髭根(ひげね)も根こそぎにしまった。さらに彼は、その樹を伐って丸太とし、丸太を截(き)って木片とし、木片を割って粗朶(そだ)とした。また、その粗朶を風と陽とに乾(ほ)し、それを火に焼いて灰とし、その灰を大風にとばし、あるいは、河の流れにながしたとする。そうすれば、比丘たちよ、その大樹も、根こそぎ伐られてしまったターラ(多羅)樹の株のように、なきにひとしい、未来永劫生ぜざるものとなるであろう」(増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p. 243「識」、p. 239「大樹」)

(2) 大樹をなくする

ここには、大樹を徹底的になくしてしまうことが述べられています。

7. 執着をなくする

(1) 経文「識」

「比丘たちよ、それとおなじように、繫縛するものを、これはいけないぞと観ていると、その人には、識は現れてこない。識がないから名色もない。……六処……、触……、受……、愛……、取……、有……、生……。生がないからして、老死・愁・悲・苦・憂・悩もないのである。かくのごときが、このすべての苦の集積の滅する所以である」(増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p. 243)

(2) 識が減する

大樹を徹底的になくするように、執着を徹底的になくすれば、再び識（我執）が生じることはないに違いありません。

(3) ひとかけらの執着

大樹の根ひとつ、枝一本、葉一枚でも残っていれば、大樹が再生する可能性があるように、ほんのひとかけらの執着が残っているだけでも、その執着が増大して我執が生じる可能性が残ってしまうのです。そのために、執着を徹底的に無くすることが、ここに説かれているのです。

8. 識

ここから、各縁起支について、経文「分別」から該当部分を抽出して、若干の考察を試みたいと思います。

(1) 経文「分別」

「比丘たちよ、では、識（識別する作用）とはなんであろうか。比丘たちよ、それには六つの識がある。すなわち、眼識と耳識と鼻識と舌識と身識と意識とがそれである。比丘たちよ、これを識というのである」（増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p.132）

(2) 識別する作用

「識」とは「識別する作用」です。

具体的には、眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識という六つの感覚・知覚によって、自分の心身を識別し、これが自分だ、自分はこういう存在だと認識する作用です。

これ以外の識別作用はないと釈迦牟尼世尊は考えています。

(3) 執着に汚染された「識」

経文「識」に、「比丘たちよ、繫縛（けばく）するものをじっと味い観ていると、その人には識（意識）が現われてくる」とありました。執着に汚染された「識（識別作用、我執）」が現れてくるわけです。

9. 名色

(1) 経文「分別」

「比丘たちよ、では、名色（五蘊）とはなんであろうか。受（感覚）と想（表象）と思（思惟）と触（接触）と作意（意志）と、これを名（みょう）というのである。また、四大種（地・水・火・風）およびそれによって成れるもの、これを色（しき）というのである。つまり、そのような名とそのような色とを、名色というのである」（増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p.131~132）

(2) 名 (みょう)

「名(みょう)」とは、「受(感覚)・想(表象)・思(思惟)・触(接触)・作意(意志)」であるとあります。これらは精神作用であり、人間を構成する五つの要素である「五蘊(色・受・想・行・識)」のうちの、「受・想・行」にあたると思います。

「識」は、前項ですでに上げられています。

(3) 色 (しき)

「色(しき)」とは、物質的存在です。ここには「四大種(地・水・火・風)およびそれによって成れるもの」とありますが、これは「肉体」を指しています。

「五蘊」における「色」に相当すると思います。

(4) 名色

「名色」は「精神作用と肉体」であり、これらを総合したものが一人の人間です。

(5) 識によって名色がある

「識によって名色がある」とあります。

「識」があってそれから「名色」が生じるという意味ではないと思います。「識」と「名色」は混然一体であることを言っていると思います。

このことは、心身の全体が執着に汚染されていることを意味しています。

10. 六処

(1) 経文「分別」

「比丘たちよ、では、六処(六根六境によってなる認識)とはなんであろうか。眼の認識と、耳の認識と、鼻の認識と、舌の認識と、身の認識と、意の認識とである。比丘たちよ、これを六処というのである」(増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p.131~132)

(2) 六処

「六処」とは「六根六境によってなる認識」とあります。

眼根と色境が接して眼の認識が生じます。

耳根と声境が接して耳の認識が生じます。

鼻根と香境が接して鼻の認識が生じます。

舌根と味境が接して舌の認識が生じます。

身根と触境が接して身の認識が生じます。

意根と法境が接して意の認識が生じます。

(3) 名色によって六処がある

「名色によって六処がある」とあります。

これも、「名色」があって、それから「六処」があるという意味ではないと思います。

「名色」には「六処」が具わっているということだと思います。

「名色」が執着に汚染されていますから、「六処」も執着に汚染されています。

執着に汚染された六根が六境と接して生じる六つの認識は、やはり執着に汚染されています。

1.1. 執着に汚染された人間性

「識」「名色」「六処」を総合すれば、「人間性」を表していると見ることができます。

執着によって生じた識によって名色があり六処があるのですから、ここには執着によって形成された人間性が現れることとなります。

ここからは、執着に汚染された人間性が、現実生活の中で執着を深めて、苦悩の人生を送ることになる経緯が述べられます。

1.2. 触

(1) 経文「分別」

「比丘たちよ、では、触（接触）とはなんであろうか。比丘たちよ、それには六つの接触がある。すなわち、眼による接触、耳による接触、鼻による接触、舌による接触、身による接触、および意による接触がそれである。比丘たちよ、これを触というのである」（増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p.131）

(2) 接触

経文には「六処によって触がある」とありますが、私は「識・名色・六処によって触がある」と、解釈しています。

執着に汚染された人間性は、執着に関係の深いものごとと選択的に接触する傾向があります。逆に執着に関係のないものには接触しにくくなります。

1.3. 受

(1) 経文「分別」

「比丘たちよ、では、受（感覚）とはなんであろうか。それには六つの感覚がある。眼の接触によりて生ずる感覚、耳の接触によりて生ずる感覚、鼻の接触によりて生ずる感覚、舌の接触によりて生ずる感覚、身の接触によりて生ずる感覚、ならびに意の接触によりて生ずる感覚がそれである。比丘たちよ、これを受というのである」（増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p.131）

(2) 感覚

「触によって受がある」とあります。「受」は感覚で感じ分けるはたらきです。

ものごとと接して、「快である」「不快である」「快でも不快でもない」と感じ分けます。

執着に汚染された人間性は、執着を満たすものに「快」を覚えます。

執着を否定するもの（正しい教えなど）には、「不快」覚えます。

執着に関係のないものには、「快」も「不快」も覚えません。

1 4. 受によって愛がある

十支縁起では、「受によって愛がある」と続きます。

五支縁起では、「繫縛するものをじっと味いながら観じていると、その人には愛著の念がいやましてくる」とあります。

両者とも、「快」なるものに心を奪われて、離れられなくなるを言っていると思います。

このあと、五支縁起が続きます。

1 5. 五支縁起と十支縁起

五支縁起では、「繫縛するものをじっと味いながら観じていると、その人には愛著の念がいやましてくる」とあります。

十支縁起では、「繫縛するものをじっと味い観じていると、その人には識が現われてくる」とあります。

執着の対象に心を奪われていると、愛着（渴愛）が生じ、識（我執）が生じるのです。

ここから、執着の対象に心を奪われないこと、執着そのものを起こさないことが勧められていると受け取ることができます。